釣れ釣れなるままに

２００９年思い出の釣行記 PART.　８

岩見沢釣遊会第７回大会

☆開 催 日　　平成２１年１１月１５日
☆開催場所　　八雲港～森港
☆入釣場所　　鷲の木漁港左→桂川河口
☆釣　　果　　アブラコ　　４５２　㎜　　１／５
　　カジカ　　４１０　㎜　　９／１３
　　重量　　７２６　０ｇ
☆成　　績　　合計点数　　１５８８　点（２魚種身長＋１０匹重量）
　　優　　勝
☆年間累計　　５　点（①６①２①①①）年間優勝

焼きアナゴ

今回はイカゴロ、マキエ等を最小限にして、カツオとイソメを遠投して魚を狙おうと思う。大会範囲がホンダワラや昆布との綱引きがないので、２５号竿を思いっきり振ってみたい気持ちもあって草臥れて継ぎ接ぎだらけの３本の竿を新調した。しかし、安竿には変わりがないのでどれだけの力で振れるのだろうか？　ついでにリールを３個購入した。メーカー希望価格が１個３５，５００円もするものに１１，８００円という破格の値段が付けられていたのだ。何か不具合でも見つかってリコール対象商品だったりして・・・。そのリールにはハイドロマックスというコーテングされた２号縒り糸を巻いてもらった。さらに、今回タモ網を使うような磯はないのだが今後のために購入した。またまたついでに２本しかなかった３０号の竿「シマノプロサーフ４２５ＣＸ－Ｔ」に１本を加えて３本とした。またまたまた、いかれた３０号竿をいつでも使えるようにと修繕してもらった。

さてさて、入釣場所や仕掛である。これはいつでも悩みが大きいものだ。女房の好きなカレイを狙おうとも思うが、相応しい釣り場がない。タカノハの可能性はこの時期では無理だろう。

そうそう、女房が広島市で行われた全国合唱コンクールのために出かけた。お土産はおきまりのモミジまんじゅうに加えてアナゴ入り竹輪と焼アナゴの干物だった。これはなかなか乙なものだった。モミジまんじゅうは私が１個だけ食べただけなのだが、いつの間にか空箱になっていたのはいつもの通りだが、アナゴの方もおやつ代わりにしていた。アナゴ狙いもいいのかなと思う。釣り新聞では、またまた苫小牧南中央埠頭でアナゴの大釣りの記事も掲載されていた。この釣り場範囲でもアナゴが上がっているというが、限りなく零に近い数字で、やはりアブラコやカジカを狙うしかなさそうだ。

カジカ・アブラコとなると昨年入釣した濁川河口でのリベンジ、釣果の上がっていた山越海岸などが思い当たるが、今後のために野田生川左岸を第一候補とする。昨年、前野会長が降車場所を間違えて随分と遠回りをしたこともあり、慎重に地図で下調べをしておく。鷲の木漁港周辺も捨てがたい。近くに桂川や湯の崎という好釣り場がある。桂川は標的と

なる消波堤のテトラ群が縦横に入っている。湯の崎は沖の岩礁群が明確な目標物となる。ただ、だだっ広いだけの磯で目標物もなく漫然と打つのはどうも自分の性に合わないのだ。

鳥崎川河口周辺も好釣り場としてあげられている。ここは国道から随分と離れているので、現在の私には心身ともに負担である。またこの時期なのでシャケの密猟者と疑われて警察のご厄介になるのもいただけない。本誌にもよく登場しているＹ氏が河口で釣りをしていると、警察に職務質問された上に事情聴取と称してしょっ引かれたという話だ。挙げ句に警察官の理不尽な対応のため釣りバスに乗り遅れ、列車で帰らざるをえなくなったというのだ。くわばら、くわばら。

これでいいのだ

集合場所に集まった。本日は参加者が２２名ということだ。仲間が完全優勝の５点（年７回大会のうち５回の最小点数で年間優勝が決まるのだが、その５回で優勝５回。私が今回優勝すればその５点になる）を狙えとプレッシャーをかけてくる。前回大会で年間優勝を確実にして、今回は本当に気楽な大会のはずなのだが、間近になってくるとやっぱり体の隅々から釣虫が蠢いてきてしまう。

人には尽きない夢があることも事実だが、人はどこまで強欲なのだろうか。自分の夢や希望をどこまで達成すれば満足するのだろうか。釣りという趣味を夢とするのも憚られるので目標とするが、ある目標を達したときに次の新たな目標がムズムズと芽生えてくるのだ。赤塚不二雄がバカボンのパパに託した「これでいいのだ」と、今ある現実を受け入れてチョンとすることで救われることもあるだろう。しかし、私にはなかなかその境地に立つことは出来そうもない。

本日の天気予報では北海道に低気圧が通過し室蘭管区気象台では、５ｍ以上の高波が押し寄せると報じている。日高方面はともかく内浦湾はどんな状況でも釣りになるということを聞いているが波が高いことも想定しておく必要がある。釣り場はどのような状況なのだろうか？　前野氏が携帯電話で波予測のサイトを開いてくれた。大会範囲の町村指定では１．２ｍ、０．５ｍ、０．８ｍと細かい数字を出しており、こちらの方が現実味を帯びていてどこでも釣りになりそうだ。併せて前野氏が古い資料を引っ張り出して湯の崎のカラーコピーを持ってきていた。自分の入釣候補にあげていたこともあり、ご一緒させてもらうことになった。

バス座席の隣には南氏が座っていた。彼は先週の医釣会の大会で鷲の木漁港右で準優勝、そして、優勝者は桂川周辺で釣りをした玉井氏だったということである。南氏は彼のブログ「ボナさんの北海道釣り三昧」で釣行記を載せており、それを参考にして次週は釣り人が殺到し、本人も入れないことが度々だという。今回の釣り場範囲も先週の大会の様子が伝わり、鷲の木漁港周辺は釣り人が殺到することが予想された。そして、「今日は札幌から２つ、函館から１つの会が同じ範囲で大会を開いているので競合することも考えられる」と言う。そこで、過去にこの範囲のどこで入賞者が出たかなどを詳しく教えていただいた。

岩見沢を発つときは雨だったが、途中でワイパーの動きが緩慢になってきた。長万部で立ち寄ったコンビニでは、雨もすっかり上がり、汚れた空気を流し去ったために星が近くまで迫るように瞬いていた。

ほくほく

私と前野氏を残して皆下り立っていった。鷲の木トンネルを抜けたところで降ろしてもらい脇道に入った。歩いていくと方向が違うようで、山の方への上り坂となっている。１本手前の脇道に迷い込んだらしい。引き返して、さらに進むと舗装された脇道があり、国道と鉄道の下を潜り抜けると目指す海岸に出た。

沖に突き出た１本の消波堤の左に前野氏が入ったので、私はその右側で竿を出す。立て続けに３０㎝程のアブラコが３本続き、喜び勇んで次の竿を振り込むと今度は仕掛だけが飛んでいった。磯際だったので仕掛に付けたルミコが海中で光っている。仕掛けを回収しようと海に入っていくと波に揉まれてルミコがあちこちに逃げまどう。一旦見失ってしまったが磯際を振り返ると再度見つけることができた。足で仕掛けを蹴飛ばしながら何とか砂浜にずりあげると小アブラコが食いついていた。仕掛けが海中に落ちてからの一瞬の間の出来事なのでいかに食い気が立っていたかが分かるだろう。

遠投に４５㎝程のアブラコがきたが新調した竿、新調した道糸でアブラコはすんなりと寄ってくる。硬い竿だとゴツゴツと逃げ回るのだが、軟らかい竿で違和感がないのだろう。アブラコばかりだと一瞬カジカはいないのかと不安になったが、間を置いて３５㎝に満たないカジカが３本きた。３本目のカジカを取り込んでから仕掛にエサを付けようとすると、仕掛けに絡まった昆布の中でもう１本が睨みをきかしていた。これで２魚種１０匹がそろってしまった。

ホクホクしているところに釣り人が現れて、消波堤と私の間に入っていいかと聞くのだ。私はテトラ際を狙っていたこともあり、いくら何でもこの狭いところに無理ではないかと言うと、残念そうに今度は右に入るという。右側はどこまでも続いている渚なので、どうぞどうぞと勧めると、私のすぐ横の竿１本分の距離に並ぶようにして竿を出し始めた。よほどの寂しがり屋さんなのか、過去にこの場所でいい思いをしたことがあるのだろう。私の海ではないのでまあ仕のないところか。彼はすぐに４０㎝程のカジカを引き抜いた。その後も、打ち返しが早くしかも丁寧である。自分を名乗ってから名前を覗うと釣り友の会のＥ氏ということだ。お互いに名乗り合ったことでその後は気持ちよく釣りをすることができた。しかし、アタリは全く出なくなった。Ｅ氏も同様のようである。自分はある程度釣ったので彼にその場を託して竿を片付けて移動する。前野氏も何とか良形のカジカ４本を手にしたようだ。

恐れ敬う

午前３時、桂川河口の左は好釣り場と紹介があったのだが、波の比較的穏やかな右に竿をセットした。コマセが効いてきた頃、カジカがポツンポツンときたが大物は出ず、リリースを繰り返す。

前野氏からの携帯が鳴った。状況を伝えるとこちらに移動してきて、彼も桂川に掛かる橋の上からどちらに下りようかと思案しているようだったが、川の右には私が入っていたので結局、左に入った。前野氏のグリーンの雨具が忙しそうに動いている。大きな声で呼びかけると、前野氏にしてはなんだか曖昧な返事が返ってくると思ったら人違いだった。今から思えば「北海道のつり」１月号に記事を書いていたＳ氏だったのだと思う。後から確認すると前野氏の雨具はオレンジだった。

４時、よいアタリが出て本日の嫁となったカジカ４０㎝強が上がった。

写真を撮っていると真ん中の竿によいアタリが出た。慌てて竿に飛びつくが、空振りだった。

あんなに澄んだ星空だったのになんだか雲行きが怪しくなり雨がしとしとと降り続き、土砂降りの雨になった。防寒具や帽子に雨が染み込み体に伝わってくるようになったので背後の屋根の剥がれた小屋に避難する。遠くから見守っていると竿を大きく引き込むアタリが出た。中には竿を倒して三脚にリールが引っ掛かって宙ぶらりんになったものもある。慌てて竿まで駆けようとするが、暗い上に壊れた舟揚場の幾つもの段差を下りるのに手間取る。絶対掛かっていると思うのだが、ハリ掛かりしていない。アカハラだろうか。この時点では大物対応のゴツイ仕掛に替えていたのでおそらくエサを引っ張ったアカハラが違和感を覚えて咥えたエサを放したのだろう。

雨も小降りになり時々雲の隙間から日も差すようになった。樽前山の中腹に霞がかかり麓には虹が架かって海岸線と調和し見事なパノラマを展開している。雄大な大自然の姿を前に、私は身が震えるような面持ちで息をのむ。どこまでも果てしなく広がる穏やかな海原。背後に広がる山野、雲の隙間から放射状に差し込む一瞬の陽光。それらは慈愛を含んだ光景のように感じられ自分が溶け込んでいくのを感じる。だが、どうだろう。この自然がひとたび牙をむくと、人間の力では抗することが出来ない力で私たちを呑み込んでしまうのだ。荒れ狂う海原の怒濤、天空を閉ざす山からの噴煙、そして大地を揺るがす大地震。その人間の力を超えたものを恐れ敬う気持ちが湧いてくる。

イカゴロを５０本と少なくしたため、天秤仕掛で２本のゴロを打ち続けることができなくなり、後半はゴロネット仕掛の１本ずつとした。マキエも足りなくなって、予備の「そい・あぶらこ・かじか」の袋を開けて使った。エサはカツオにばかり来た。イソメも房掛けにして遠投したのだが、全くそのままの形で戻ってきた。

前野氏は川筋から元の釣り場に戻り規定の魚を揃えたようだ。Ｅ氏は結局、身長賞のアブラコ４９．２㎝にカジカを揃えて１５４４点という高得点で優勝したという。私はその後アブラコ１本にカジカ５本ほどを追加して８時には余裕を持って片付けた。

樽前山の勇姿を背にした前野師匠、その向こうがＥ氏。

完全優勝

入釣時に歩いた１本道を通って戻っていくと、なんだか違う道に迷い込んでしまった。前方に５０段程の丸太を横にした階段が見えてきた。もう一度戻って来た道を捜すことも考えたのだが、列車や国道を走る車の音が聞こえてくるので、その階段を利用することにした。最上段まで上り詰めると、神社の境内に出て国道への道が見えたのでホッとする。お稲荷さんに騙されてしまったのだろうか。

審査結果

優　　勝	鹿島釣狂	１７８８点（アブラコ４５２㎜+カジカ　４１０㎜+７２６０ｇ）	桂　　川
準優勝	南　　勝	１７０６点（カジカ　４０５㎜+アブラコ３６０㎜+７４１０ｇ）	落部川
３　　位	岩本　満	１６２２点（アブラコ４１０㎜+カジカ　３７２㎜+６４００ｇ）	山越駅前
４　　位	嵐　光博	１６１２点（アカハラ４２７㎜+カジカ　３３５㎜+６５００ｇ）	落部川
５　　位	大前健治	１４９６点（アカハラ４２７㎜+カジカ　３３９㎜+５３００ｇ）	落部川
身長優勝	川原要四郎	４４．２㎝（アカハラ）	石倉漁港

審査は山越バス停の軒先を利用させていただいて実施した。目見当では私は嵐、南、岩本氏と接戦のようだ。重量では南氏が７４１０ｇ、私が７２６０ｇと計測され、私より南氏の方が上回っていたのだが、婿のアブラコの身長が効いて優勝させていただいた。

これで年間完全優勝達成である。今年はあれよあれよと狐につままれたような感じで年７回の大会の内５回で優勝できたのだ。仲間がバクダンで寄せた魚を釣らせてもらったり、間違えて入ったところに魚がたまっていたり、諦めかけたところに大物がきたりの偶然が重なったのだ。

１９９２年、私が岩見沢市に自宅を構えたことを切っ掛けにして岩見沢釣遊会にお世話になってから、今年（２００９年）で早１８年を終え、のべ１００回の大会に参加したことになっている。防波堤や砂浜でのカレイ釣りの経験しかない者が「釣り会」のメンバーになったものだから、見ること聞くことがどれも新鮮で胸をときめかして大会に参加したものである。当然、成績の方はあまり奮わなかったが、回を重ねるごとに上位に顔を出すこともできるようになってきた。

そして、入会してから４年目の１１月大会で念願の初優勝を飾らしていただいた。実に大会参加２２回目のことである。そのことを貴誌「北海道のつり」に初めて実名で投稿させていただいたが、私の周辺の反響が非常に大きくて差し障りがあっては困ると鹿島釣狂を名乗らせていただいてきた。

その後、大会優勝１７回、年間優勝３回を数えた。今年の成績を振り返ってみると、７回平均で１２７９点、５回平均となると１３６３点で非常に高い得点をたたき出したことになっている。過去３回の年間優勝平均点数と比べてみても１１４７点→１２０１点→１３６３点と徐々に点数アップが図られている。これもひとえに会の皆様のご指導の賜と思っている。年が明けた総会では前野会長から優勝旗を授与され仲間からもたくさんの賛辞をいただいた。

前野会長から優勝旗を授与される

本日の審査提出魚

入賞者上段左より　５　位：大前健治、４　位：嵐　光博、身長賞：川原要四郎
　　下段左より　準優勝：南　　勝、優　勝：鹿島釣狂、３　位：岩本　満

本日の全釣果。

【追記】

カジカ調理法

本年度最後の大会を終えた。大量の魚は全部下処理をして調理し、残ったものは冷凍庫に保存したが冬の間に食べ尽くしてしまうだろう。

バスの中で、カジカの刺身のことが話題となった。カジカを刺身用にとスライスすると虹色に輝くのが気持ち悪いというのだ。青みの魚の鮮度が落ちてくると光るようになるというのが原因のようだ。カジカは青物ではないので大丈夫だと思うがどうなのだろう。むしろ光っていた方が生きがよいと思うのだが・・・。

また、カジカの肝和えが美味しいとの一致した意見だ。茹でて小骨を取ったカジカに磨り潰した肝を味噌と辛子で味を調えて和えると絶品だというのだ。機会があったら試してみようと思う。南氏は喉に小骨が突き刺さり、病院で鼻から管を通して抜いたことがあり、その時の辛さから魚を苦手にしているという。

ブログ

帰りのバスの中では、「つりしん」の記者である岩本満氏から釣り場の状況を詳しく尋ねられた。私は様々な記事を参考にさせていただいている手前断るわけにも行かない。口頭では伝わりにくかったので、曇ったバスの窓ガラスに描いて説明した。岩本満氏の「アイナメさんの釣悠々」に載せられてしまうのだろうか。

正月、何気なくインターネットを開いていると鹿島釣狂に出くわしてしまった。７月１１日に雄冬でイカ釣りをしたときのことだ。「KAZUMIN の隠れ家」というブログの中で「北海道釣クラブ」の廣田和美氏が紹介してくれていたのだ。